

学術基礎英語（後期・集中講義）授業報告書

ゲストスピーカー

関口 正也

奈良女子大学大学院で実施されている「魅力ある大学院教育イニシアティブ」の一環として「学術基礎英語」の授業のゲストスピーカーを二週にわたって勤めた。以下では当該授業について報告する。

1. 授業概要

本授業は、学生が英語をツールとして使用し、自らの考えや研究成果を表現できるようになることを志向し、そのために必要な学術英語の基礎を習得することを目的として実施された。授業の概要は表1に示すとおりである。

表1：授業概要

開設科目名	学術基礎英語（集中講義）
主担当	増井正哉教授（ゲストスピーカー：関口正也）
対象	博士課程前期学生（国際社会文化学、人間行動科学、人間環境学） 8名出席（1回生8名）（履修登録8名）
開講期	前期：10月7日（土）、10月21日（土）の2回（各6時間程度）
授業方法	講義、個人演習、グループワーク、グループ発表とディスカッション
授業の概要	学術交流、調査研究、研究発表で必要とされる実践的な英語活用能力の向上を目的とし、そのための各種スキルを講義と演習を通じて習得する。
学習・教育目標	学術英語の基礎を理解し、英語で学術企画・成果の表現をできるようになる
成果	受講生は英文で論文概要を書くことができる。 受講生は英語で学術成果・研究企画のプレゼンテーションをできる。
講義の特色	完璧な英文を書くことを目指すのではなく（それは英文チェックをネイティブに依頼すれば可能）、英語を道具として使い、国際人として如何に自分の考え方を的確に表現し、伝えるかに主眼を置く。
授業計画	<u>1週目（10月7日）</u> 英語による他己紹介 なぜ学術英語を学ぶのか 良い英文ライティング・プレゼンテーションとは何か 個人演習1 英文のルール・書き方1 プレゼンテーション準備（演習：グループワーク） <u>2週目（10月21日）</u> 個人演習1の講評 英文のルール・書き方2 各グループによるプレゼンテーションとディスカッション 個人演習2

2. 授業の講評

授業では講師からの一方的な講義だけではなく、小グループによる議論や学生によるプレゼンテーションなど、学生が主体的に考え、自ら学ぶことを重視した。後期の集中講義は前期と比較し受講生の数が少なかった（前期 32 名、後期 8 名）ため、前期よりも学生のディスカッション時間を増やしたり、課題執筆の個別指導を行うなど、よりきめ細かい指導を心がけた。

はじめにアイスブレイクとして学生による英語での「他己紹介」を行った。名前、学部、研究分野、出身地、子供の頃どんな子だったかを各自英語で紹介してもらった。「他己紹介」とは、2 名 1 組（端数は 3 名 1 組）になって互いに質問をし、その内容を全体に紹介するというものである。本講義は学部の異なる学生が集まっているため、この演習は受講生どうしの相互理解になる。また、英語で話すことにより、下手でも良いからとにかく喋るといふ雰囲気を作ることに貢献できたと考える。

アイスブレイクの後、学生を 3 つのグループに分けた。分けた基準は出身地と所属学部である。今回は各グループ少人数（2～3 名）であり、グループワークに使える時間も 2 週間あることから、学部についてはなるべく分かれるようにした。これは、普段交流のない学部の学生が共同作業をすることにより普段とは異なるアイデアの交流ができればと考えたためである。

最初のグループワークは「なぜ学術英語を学ぶのか」ということについて議論してもらった。これは、学生自らがなぜ自分達がこの授業を履修しているのか、そしてこの授業を通して何を学ぶべきなのかということを中心に考えてもらうためである。表 2 にはグループ毎の議論の結果をまとめた。

表 2：なぜ学術英語を学ぶのか

グループ A	世界の人々に研究成果を知ってもらえる 自分の研究領域について、他国との情報交換ができ、国際比較できる 合理的で的確な表現や論理的思考を身につける
グループ B	発信：英語で研究発表することにより、自分の研究を世界に伝えることができる 受信：英語の論文を読んだり、英語の講演が聞けるようになる コミュニケーション：外国の研究者とのコミュニケーションが取れるようになる（同じ分野、同じ興味の人との意見交換）
グループ C	自分が英語で発信する／情報を集める 研究や仕事で必要になる可能性がある 学術英語の基礎を知りたい（読む、書く、聞く、話す） 一つの研究テーマについていろいろな国の人とディスカッションする 英会話は英会話学校でも学べるが学術的な英語は学べない 研究するときに英文を読み書きする機会が多いかもしれない

各グループから出てきた意見は、講師が事前に用意していたものをほぼカバーしていた。この作業を通じて、学生はなぜ学ぶのかということについて、自分の意見だけでなく他の学生の意見や講師の意見を含め多様な考えがあることを知ることができた。

つづいて、良い英語論文やプレゼンテーションとは何かという議題について議論した。結果は表3に示すとおりである。

表3：良い論文・プレゼンテーションとは

グループ A	主張がはっきりしている 構成がしっかりしている（例：目的→方法→結果→考察） 主観的になりすぎしていない 見やすいデザイン（例：文、グラフ、図の配置、スライドを送る速度） 話し方（話す速度、声の大きさ）
グループ B	体裁：見た目が肝心。文字を大きく、見出しをはっきりと図やグラフを用いて 内容：目的・伝えたいことが明確、わかりやすい具体例、文章は簡潔に
グループ C	言いたいことがはっきりわかる（結論が最初） 具体的な例を出す（図やグラフを提示する） 視覚的な媒体（パワーポイントなどを使用） ストーリーが相手にわかりやすく問題提起を含んでいる（考えてもらえたり、ディスカッションしやすいか） 協調したい部分（キーワード、ポイント）が明確 相手にとって興味あるテーマか 相手や目的によってプレゼン方法が応用できる

様々な意見が出てきたが、共通していたのは、論旨が明確であることと論文なり発表がアトラクティブであるということであった。これらの演習の結果は前期集中講義における結果とほぼ同じであった。この後、良い論文、良いプレゼンテーションについて講義を行い、読み手や聴衆のことを考えた論文・プレゼンテーションについて補足した。

個人演習

初回の午前中の最後に 50 分ほど時間を取り、個人演習を行った。課題は雑誌の記事（1 ページ）を読んで、その趣旨を 100～150 字程度で要約するというものである。時間は 30 分程度。これは、本格的に学術英語の講義をはじめる前に、学生のレベルと英文の特色を把握するとともに、短時間に文章を読み内容を的確に把握し、それをまとめるというトレーニングが目的であった。結果は第二回目の授業の中で講評した。共通して見られた傾向として以下のことがあげられる。

- 課題の雑誌記事の文章をそのまま書いている（言い換えがなされていない、もしくは、引用句 “ ” とそれ以外の区別がなされていない）
- 筆者の論点が正しく把握されていない
- 要約が雑誌記事前半部分に集中している
- 文章のスタイルや語彙が口語調

講評においては、全体的な傾向について説明するとともに、学生の書いた文章の事例も引用しながら適切な表現について学術英語という観点から講義した。

また、学生の評価に関わる個人演習 2（論文概要作成）に当たっては、前期集中講義での事例（問題点）も紹介しつつ、論文概要作成のノウハウについて講義した。今回は少人数であったことから、講義のみならず、8人全員に授業時間内に各人が書こうとしている論文概要の構成について個別に指導を行った。

英語でのプレゼンテーション

今回の授業の重要課題として学生グループによる英語でのプレゼンテーションを行った。初回授業で3つのグループ毎に発表する課題を決めてもらい、次週の授業までに各グループでプレゼンテーションをパワーポイントで準備し英語で発表してもらうという形式である。テーマは講師がアフガニスタンで仕事をしているということもあり、「アフガニスタン難民（Afghan Refugees）」とした。アフガニスタン難民や国内避難民（IDPs）の状況や再定住支援について写真を含め概説し、具体的なグループ課題について説明した。各グループではこのテーマに沿って具体的にどんなトピックで発表するかをはじめに議論してもらい、表4の発表トピックが選定された。



表4：プレゼンテーション（アフガニスタン難民）

グループ A	アフガン難民の職業訓練
グループ B	アフガン難民の食生活
グループ C	アフガン難民の健康問題

翌々週、学生グループによる英語でのプレゼンテーション発表がなされた。各グループ10枚程度のスライド（英語）を英語で発表した（発表のハンドアウトは別添を参照）。ただ、発表に対する質疑応答・ディスカッションについては、学生の会話能力を勘案し、日本語で行われた。プレゼンテーションは全体的には時間（発表 15 分程



度、質疑応答 15 分程度)、発表ボリュームなどは事前に指定していた範囲内で行われた。発表の方法については学生の自主性に任せたが、メンバー全員でトピック毎に発表するという形式がとられていた。プレゼンテーションのスライドについては、事前の講義（論理的な構成の仕方など）で得たものも反映されており、見た目も配慮されており、専門外の領域を扱った発表としては良く出来ていたと思われる。今回は準備期間が 2 週間あったこともあり、前期に比較し発表レベルは高かった。ただし、グループ A は当初アフガン難民の職業訓練を発表するとしていながら、実際にはアフガニスタンにおける DDR(武装解除、動員解除、社会復帰)をテーマにした発表を行った。発表内容は良かったが、テーマを変えたことについては、悩んだ挙句のことだったとのこと。本授業は英語を主眼においたものであるため、発表を続けてもらった。

質疑応答やディスカッションにおいては、英語での発表であったため、発表者以外のグループの学生が発表の意味をよく理解できていなかったということはあったものの、前期集中講義の時に比べると、活発な議論が学生どうしなされた。講師が質問や議論を促したということはあったが、人数が少なかったため、議論しやすい環境にあったのではないかと推察される。なお、共通して見られた傾向として以下のことがあげられる。

- 発表のときにスクリーンやメモを見ていて聴衆を見ていない
- スライドやトピックを変える際にそのガイドをしていない
- メモやスライドの文章を棒読みしている

なお、講師が授業で使ったハンドアウトや資料については別添を参照。

3. 学生の評価

学生による自己評価を図 1 に示す。理解度の段階は 1: 全く理解していない、2: 少しは理解できた、3: 概要については理解できた、4: 授業内容については大方理解できた、5: 人に教えることができる、となっている。全体の半数以上の学生が今回の集中講義についてある程度理解できたと感じていることが評価結果から伺える。前期との比較では、後期の方が「英語でのプレゼンテーション技術」の自己評価が相対的に高かった。これは、準備期間が 2 週間あったことと、グループが少人数であったことから、前期に比べじっくり課題に取り組めたということによるものと考えられる。

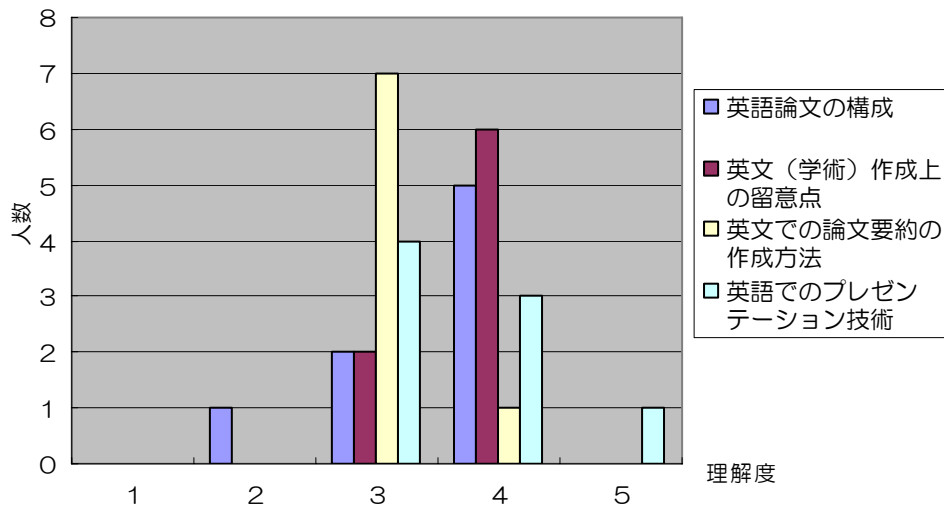


図1：学生の理解度

学生の成績評価については、グループワーク（プレゼンテーション）と個人課題（論文概要作成）によって行った。グループワークは20点満点で評価し、個人課題を80点満点とし、合計で100点満点となるようにした。グループワークの結果は以下の通りであった。

グループA 16点
 グループB 18点
 グループC 17点

一方、個人課題（論文概要 300 Words 以内）の採点結果は図2の通りであった。採点は80点満点で、その内訳は構成力 30点、伝達力 30点、語彙・文法など表現方法 20点として評価した。一日目の個人課題に比較し、授業で学習したことを活かしたことで、提出までに1週間時間があつたこともあつてか、提出物のレベルは向上していた。採点においては、文法的なことよりも構成や伝達力を重視した。点数の目安としては、授業を通じて学習したことが活かされていれば60点以上は確保でき、とくに良くまとまっているものについては、70点以上を付けている。図2は前期と後期の学生の成績を比較したものである。前期と比較すると高得点に分布している。平均点で見ても前期が63点であったのに比べ、後期は68点であった。これは、前期に比べ少人数であったことから各学生に対するより細かな指導ができたからと思われる。

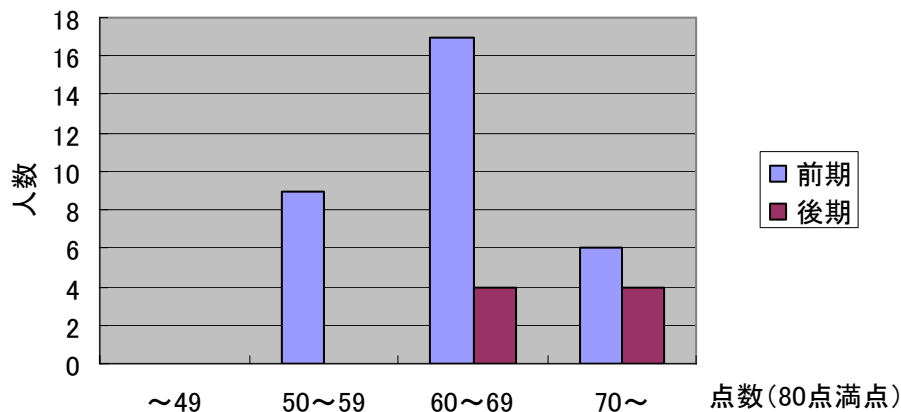


図2：個人課題の採点結果

なお、受講生の採点結果については別添を参照。

4. 授業の評価

今回の授業の評価とフィードバックのため、学生への授業評価に関わるアンケートを行った。一つは講義内容・手法、もう一つは講師についてである。アンケートの中で比較的多く見られた学生からのコメントを良かった点、問題点・改善点に別けて表5にまとめた。

表5：学生による授業評価

良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学術英語の技法について学ぶことができよかった。 ・ 英語でプレゼンテーションしたことが勉強になった。 ・ 英文を書く際の具体的な留意点など学校英語ではわからなかったことを知ることができた。 ・ アドバイスがわかりやすく、パワーポイントも見やすく、難しい内容だったが理解しやすかった。 ・ 実践的課題が多く用意されていて学んだことが身につけやすかった。 ・ 具体的な学術表現について例を交えて説明されていて理解しやすかった。 ・ 学生の英語レベルに合わせた講義が理解しやすかった。 ・ 課題は自分の分野外であったが、かえって知見を広げる機会となって良かった。
問題点・改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマがなじみのない分野だったので大変だった。 ・ グループが2名しかおらずプレゼンテーションの準備など大変だった。適正な人数調整（前期・後期）をすべき。

5. 課題と提言

今回は前期に続き、二回目の集中講義ということもあり、前期の反省も踏まえつつ、比較的余裕を持って授業に臨むことができた。学生も前期の 32 人に比較し、後期は 8 人だったため肌理の細かい指導ができたものと思われる。

今回のようなワークショップ形式の授業運営では、適正人数は 15~20 名が妥当なように思える。グループワークの適正人数は 5 名前後である。人数が多いとグループ数や各グループの人数が増え、議論の時間を減らさざるを得ないことになる。反対に人数が少なすぎるとグループワークでの一人当たりの負担が増えたり、議論における意見のバラエティが少なくなるという問題がある。前期・後期で学生を分ける場合、適正な人数配分を行うことが重要である。

最後に、個人的には前期・後期二回の集中講義を通じて、教えることの楽しさを実感すると同時にその難しさを感じ、改善の仕方についてもいろいろと考えることができた。今回の経験は今後の講義だけでなく日々の開発コンサルタントとしての実務の中でも活かしていけるものと確信している。このような機会をいただいたことに対し、心より感謝したい。